こだま俳壇(10 月通信句会)

秋の水流れを分ける石一つ　　島田多嘉子

揃へたる手話の指先涼新た　　坂　　守

街の灯を離るる舟や水の秋　　中野みどり

薄闇に池の浮草秋の風　　本山　文子

一人居の自粛の日々や虫の声　　松尾佐知子

阿弖流爲の駆けし天地や星流る　友井　眞言

すくい取る水の軽さや秋の水　　中村　桂子

マンションの足場作業に西日かな　瀧澤　正行

昼の月白さ極める残暑かな　　三井　光子

添水（そうず）鳴る茶席の気配深みゆく　木村　武子

ワクチンの接種祝いに新酒かな　　柳瀬　節子

宅配の荷物の運ぶ残暑かな　　田中　一男

駅降りて荷物の重み残暑尚　　並木まり子

秋の水光を受けて山写す　　小室　豊子

チヌ（黒鯛）待ちて我慢比べの秋暑し　角田　英昭

地に注ぐ流星群や何処落ち　　後藤　貞夫

蜩の声透き通る夕間暮　　白井保次郎

瓶に挿すハーバリウムの水中花　　高橋　和江

秋の水山よりひいて鮎放つ　　常世田芳子

流れ星釣り人一人居なくなる　　講師　太田　土男